高松宮賜杯のゆくえ

― 昭和二〇年代後半の市民体育大会 ―

横浜市における各種スポーツの歴史について調べるときに、先ず手に取る書籍のひとつに、『横浜スポーツ百年の歩み』がある。

この書籍の二三九ページに、元保土ケ谷区体育協会副会長根本宣司が「高松宮杯体育大会」という回想を寄せている。その回想では、一九五一（昭和二六）年一〇月に第二回高松宮杯体育大会が三ツ沢競技場で開催されたこと、保土ケ谷区の体育協会では大会に向けて選手強化を行ったこと、その結果、男女総合優勝を果たし高松宮杯を獲得したこと、一二月に行われた総合閉会式において高松宮から賜杯を授与され、保土ケ谷小で行われた祝賀会でも高松宮がお祝いの言葉を述べられたことが回想されている。

写真1　高松宮と石河市長 年未詳　　石河志ヅ江家資料

これは横浜市のスポーツ関係者には知られた事実だと思われるが、同書では、ほとんどこの大会について触れられていないので、どのような大会であったのか、いつ始まっていつ終わったのかなど、当時の新聞記事や担当部署の発行物などから見ていこう。

高松宮宣仁と当時の横浜

昭和初期、海軍将校であった高松宮は、横須賀海軍航空隊教官の時もあり、観艦式等で神奈川県を訪れることも多く、また葉山別邸もあることから神奈川県との関わりが深かった。

第二次大戦後も、一九四六（昭和二一）年九月、横浜市長半井清の依頼に応じ、下谷本町（現青葉区）などに視察に訪れている。四七年には、共同募金運動激励のために来県し愛児園などを訪問している。また、アイケルバーガーの午餐会やクック邸での茶会にも来浜している（『高松宮日記』第八巻、中央公論社、一九九七年。『横浜市史Ⅱ』資料編3）。一九四九年四月一〇日には、日本貿易博覧会に来観している（『日本貿易博覧会記念写真帖』）。同年九月の第四回国民体育大会水上大会では、一五日の開会式で「お言葉」を述べている（『神奈川新聞』九月一六日）。同国体では、秋季大会でも本牧ヨット会場・三ツ沢バレーボール会場・反町体操会場へ訪れている（資料編3、一六四ページ）。五四（昭和二九）年には開国百年祭記念式典に臨席している。

また、五一（昭和二六）年四月に市長となる平沼亮三とは、スポーツを通じての知己であり、四一（昭和一六）年明治神宮国民体育大会総裁が秩父宮から高松宮へと替わったことを、「宮様の御徳を御兄宮様のやうに存じ上げなかつたのであるが、総裁宮にならせられて以来、御咫尺申し上げて、御兄宮様と同様な御高徳に感じ入つたのである」と平沼は記している（『スポーツ生活六十年』）。

高松宮賜杯授与のはじめ

高松宮賜杯は、一九五〇（昭和二五）年四月二日に行われた第四回横浜駅伝に先立って、スタート地点である中区役所前広場で行われた式典において、高松宮から石河京市市長に手渡された。同駅伝を共催する神奈川新聞では、「地方競技では前例のない賜杯」・「地方競技初の賜杯」と報じられた（『神奈川新聞』四月二・三日）。

この式典について、昭和二五年『横浜市事務報告書』では、「市体育奨励の思召しにより特に高松宮殿下から体育優賞杯を下賜され、殿下御臨場の下中区役所前広場において全スポーツ人参集の上賜杯式典を挙行した」と記している。また『昭和二十六年度　横浜市体育の概要』（横浜市体育課）でも、同日の式典の写真を掲載して、「二十五スポーツ年度の開幕として高松宮殿下の御来臨を仰ぎ、感激の一瞬から華々しいスタートをした」と記している。

このように、どのような過程により賜杯授与となったのかは分からないが、高松宮の横浜市「体育奨励の思召し」により賜杯の授与となり、中区役所前広場において式典が行われた。

この式典に続いて、先に見たように第四回横浜駅伝が行われた。これは、中区役所からスタートして各区役所を結ぶ一〇区間、七三・六キロメートルの各区対抗による駅伝競走で、引き続いて警察消防対抗駅伝も行われた。各区対抗では、四時間二六分四五秒のタイムで鶴見区が優勝した。これを報じた神奈川新聞には「高松宮杯争奪第四回横浜駅伝」とあり、鶴見区に高松宮賜杯が横浜市長旗・神奈川新聞楯とともに贈られている（同紙四月三日）。

高松宮は駅伝も観戦し、先の新聞記事には「なかには疲労のあまり失神しかけて観戦中の宮様に抱かれるなどの中継所風景も織りこまれ」と報じられており、かなり近いところで観戦していたようである。

このように最初の賜杯授与は、横浜駅伝の勝者である鶴見区であった。

しかし、横浜駅伝の優勝区に高松宮賜杯が贈られたのは、この一回のみであった。一一月には「高松宮杯かけ／横浜体育祭」（『神奈川新聞』一一日）が高松宮妃臨席のもと予定されている。

高松宮賜杯は「各区対抗に優勝した区に贈られ、目下中、西、神奈川三区で争っており十日にきまる」とあり、一二日の体育祭では、第一部の授与式において「さき頃行われた各区対抗競技大会」で第一位となった中区に高松宮賜杯が贈られ、第二位西区に米第八軍カップが贈られている（同一三日）。

この「各区対抗競技大会」は、九月から一〇月にかけて「秋季市民大会」として行われた競技のうち、各区対抗のバドミントン・卓球・陸上・軟式庭球・野球などを指すようである（『昭和二十六年度　横浜市体育の概要』）。なお前年より市民体育大会は、各競技団体により主催・運営されるようになったという（『横浜市体育協会八十年記念誌』収載の横浜市陸上競技協会の項）。

大会最中の九月二〇日には「高松宮杯授与に関する採点委員会」が開かれ、同年度の暫定授与方針と採点方針、翌年度以降の採点方針が話し合われている（『横浜市体育の概要』）。

このように一九五〇年秋には、高松宮賜杯は各種の各区対抗競技の総合優勝区に贈られるようになった。

一方、横浜駅伝は、翌年度の第五回は一九五二（昭和二七）年二月となった（『横浜健民』第二七号、一九五二年二月）。

一九五一年度大会

一九五一（昭和二六）年は、最初に触れた回想のように、秋に高松宮賜杯争奪の大会が開催された。なお、同年四月の選挙により、市長が石河京市から平沼亮三に替わっている。

同年の大会は「開催要項」（『横浜体育』第二三号、一九五一年一〇月）や「プログラム」などが残っており、これらによって概要をみていこう。

先ず大会名は、要項表題が「高松宮殿下賜杯争奪各区対抗秋季市民大会開催要項」とあるように、高松宮賜杯争奪を明確にしている。事務報告書によると市民体育大会が二八回あり（前年一一月～当年一〇月）、そのうちの秋季大会が対象となった。そのため「水泳が入っていたならば、西区はお隣の高松宮杯を横滑りさせる事ができたかも知れない」との記述もある（「高松宮賜杯を巡って」、『横浜体育』第二三号）。

競技は、陸上（三沢陸上競技場）・バスケットボール（フライヤージム）・バレーボール（三沢バレーボールコート）・軟式野球（刑務所グランド、保土ケ谷球場）・相撲（レアルト劇場裏広場）・軟式庭球（三沢テニスコート）・柔道（鶴見警察署）・卓球（神奈川体育館）・バドミントン（共進中・蒔田中）の九競技で（野球・相撲は男のみ）、陸上種目は、トラックでは一〇〇メートル男女・二〇〇男女・四〇〇男・八〇〇男・一五〇〇男・五〇〇〇男・一〇〇〇〇男・四〇〇リレー男女・一六〇〇リレー男、フィールドでは走り高跳び男女・砲丸投げ男女・走り幅跳び男女・円盤投げ男女・棒高跳び男・槍投げ男女・三段跳び男であった（『第二回高松宮賜杯争奪　横浜市各区対抗秋季市民体育大会』）。

選手の参加資格は、当該区に在住か在勤、学生の場合は在住のみ、一名一種目のみ、同一人が二区以上の予選に出場した場合は中央大会への出場は認めない等であった。

表彰は、男女総合優勝区に高松宮賜杯、男子総合優勝区に横浜市長杯、女子総合優勝区に横浜第八軍将校団トロフィーが贈られ、種目別優勝区には賞品・賞状、二・三位には賞状が贈られる予定であった。

大会開催は一〇月一三日、一四日の予定であったが、雨天で陸上が二一日、相撲が一六日、軟式庭球が一一月一〇日となった（『横浜健民』第二四号、一九五一年一一日）。大会の結果は、総合優勝が先の回想にあるように保土ケ谷区、男子の優勝も保土ケ谷区、女子は南区となった。競技別では、陸上は男女共南区、バスケットは男女共中区、バレーは男港北区・女保土ケ谷区、野球は磯子区、庭球は男鶴見区・女南区、卓球は男中区・女港北区、バドミントンは男西区・女磯子区、柔道は鶴見区、相撲は西区であった（『横浜健民』第二六号、一九五一年一二月）。

写真2　伊勢佐木町のフライヤージム
年未詳　左上のかまぼこ形の建物
池田義夫家資料

この表彰式は回想にもあるように、一二月に開催された横浜市体育祭のなかで行われた。前年は一一月開催であったが、この年は一二月二二日にフライヤージムで開かれた。体育祭は午後一時から開催し、高松宮の到着を吹奏楽で迎えたのち、横浜市体育協会会長の開会宣言、成績発表に続いて、保土ケ谷区に高松宮賜杯と横浜市長賞が、南区に米八軍将校団トロフィーが贈られた。その後、スポーツ紹介として卓球・体操・バスケットボールが行われた。卓球では全日本選手権優勝者で「現在日本の生んだ最強打者で」、「戦後益々その技円熟し斯界の第一人者で来春三月ボンベイで行われる世界選手権大会の日本代表選手である」藤井則和が選手権三位の巴保春と試合を行い、また体操では全日本選手権を連覇中の竹本正男等が競技を行い、バスケットでは「御存じの通り過去九十六連勝無敗の驚異的記録を有する」、「二年連続

の全日本選手権獲得を始め」とするタイトルを有する日本鋼管と早稲田大が対戦した（『横浜健民』第二六号）。

体育祭終了後には、保土ケ谷小学校において保土ケ谷区の祝賀会が開かれ、先述のように高松宮が臨席している。

一九五二年・五三年大会

翌五二（昭和二七）年は、年度当初では一〇月下旬から一一月三日の予定で、「文化の日記念高松宮杯争奪秋季市民体育大会」となっていたが（『横浜健民』第二九号、一九五二年四月）、実際の日程は、次にあるように一〇月一〇日～一二日となった。

この年は、開会式が横浜体育祭を兼ねて行われ、一〇月一〇日にフライヤージムで行われた。体育祭ではオリンピック体操選手団の模範演技と江口・宮舞踊団の舞踊も予定されていた。実際の競技は一部を除いて一二日までの三日間で行われ、前年と同様に陸上・バスケットボール・バレーボール・軟式野球・卓球・軟式庭球・柔道・バドミントン・相撲が行われた。最終日の一二日の様子を伝える記事では、「総合優勝の南区には高松宮杯、男子優勝西区には横浜市長杯、女子優勝南区には米八軍将校団トロフィーが贈られた」とあり、当日に表彰も行われたようである（『神奈川新聞』一〇月一三日）。

翌五三（昭和二八）年も、一〇月におこなわれた秋季市民大会が高松宮賜杯争奪大会であった。

写真3　高松宮と市長・助役・市会議長
年末詳（石河市長時代）　石河志ヅ江家資料

年度前の予定では、「実践系統図」の「スポーツ」「行事」「市民競技」には、駅伝大会・春季市民体育大会・夏季市民体育大会・冬季市民体育大会などとともに、高松宮杯争奪各区対抗秋季市民体育大会とあるが、「？」が付せられており、「年間行事予定表」には掲載されていなかった（『昭和二十八年度横浜健民体育事業一覧』）。高松宮杯争奪の中止が考えられていたのか、日程によるものかは判然としない。

しかし、九月発行の『弘報よこはま』第五七号では、「高松宮賜杯をめぐり／各区対抗体育大会」として、一〇月九～一一日の三日間、「二千五百人の市民スポーツマンを動員して、スポーツ祭典の絵巻がにぎやかに展開される」と告知し、従来通り九競技の実施が予定されていた。

実際の大会は、バドミントンが会場の都合により一〇月四日に平楽中学校と石川小学校で行われ（『朝日新聞』一〇月六日）、他の競技でも野球が一三日まで行われた。その結果、南区が総合連覇となり、女子優勝も南区が連勝で、男子優勝は神奈川区となった。この表彰式は一五日に市長室で予定されていた（『朝日新聞』一〇月一五日）。

このように、一九五二年と五三年も五一年と同様に、秋季市民体育大会が高松宮賜杯争奪大会として行われている。

市民体育大会の改革

一九五四（昭和二九）年二月に開催された「第四回月例スポーツ振興会議」では、市民体育大会の開催方針について、前の会議からの「宿題」となっていた次のような議題が出ている。五三年までの大会では、区対抗や選手中心の競技形式であったが、それを「市民サービスの立場から広く一般市民を対象とした大会（オープン形式）を考えたいとの」事であった（『横浜健民』第四五号、一九五四年三月）。市の考えは、「区の予選会を実施しないで中央大会に推薦で出してくるなど」があり、「区対抗の競技の部面はスポーツの普及や志気高揚の面で思わしい発展が見られない」とし、「記録を中心にしたものであれば選手権のようなもので、種目協会が担当してやればよ」く、「日本体育協会とのつながりがあるので、県単位で考えれば良い」とし、「市民体育大会は、時代や社会の実情に即して常に市民の全体的な立場からうちたてられるべき」としている。

競技団体からは、時間・会場などの問題から、従来の選手権的なものにリクリエーション的なものを加えることは困難との意見も出されたが、「この線に沿つて今一度種目毎の検討を加えて御連絡願いたい」と各競技団体代表に依頼をしている。

同年開催の秋季市民体育大会は、一〇月二日から各地で一六種目が行われる予定となったが、「これまでの各区対抗制を撤廃、全然オープン制で市民の自由な参加を求めるのがネライ」（『神奈川新聞』一〇月二日）と報じられているように、区対抗制から市民オープン参加の大会運営に変更となった。これに伴い、これまで総合優勝区に贈られていた高松宮賜杯などは無くなっている。

【参考文献】
『日本貿易博覧会記念写真帖』（日本貿易博覧会事務局）一九五〇年、横浜市体育史企画刊行委員会・横浜市体育史編集会議企画編集『横浜スポーツ百年の歩み』（横浜市教育委員会事務局体育課）一九八九年、「高松宮宣仁親王」伝記刊行委員会編『高松宮宣仁親王』（朝日新聞社）一九九一年、高松宮宣仁親王『高松宮日記』第八巻（中央公論社）一九九七年。

（百瀬敏夫）